秋のイベント気軽に参加を

ハッピーハロウィン魔法の地図

１０月２１日（土）
午後１時３０分～

みくに大好き部会

みくにが大好きになるハッピーハロウィン「魔法の地図」は今年で１５回目を迎えます。毎回、仮装した子どもたちで町並みはにぎわいます。
今年は合言葉を使ってお菓子をゲットするお店と、スタンプを集める場所を準備しています。三国南、北小校下の子どもたちはぜひ参加し、地図を頼りに三国の街を楽しく歩きましょう。またお手伝いしてもらえる中学、高校生も募集します。

シバザクラ植栽

生活環境部会

１１月４日（土）午前８時～
汐見公園

汐見公園のシバザクラ植栽事業、昨年は三国中学校の８クラブの部活動の生徒はじめ多くの地域のボランティアの協力をいただきました。
春には汐見公園を彩るピンクの花で地域の方々の目を楽しませました。
14 年目を迎える今年の植栽は張り替えたシートに大野のシバザクラの里実行委員会が育てた苗６００株の植付けを予定しています。皆様のご協力を心よりお待ちしております。

ディスクゴルフのつどい

健康福祉・育成部会

１０日２９日（日）午前９時～
三国海浜自然公園

今年５月、世界大会が開かれた会場で、「ディスクゴルフ」を体験してみませんか。
子供から高齢者、そして女性や運動の苦手な人、もちろんスポーツが得意な人も、みんなが一緒にプレーできます。是非ご参加してください。

神明社例大祭　三国節輪踊り

９月１６日（土）午後７時～
神明社

伝統的な輪踊りの風情が楽しめる神明社輪踊り。輪踊りの風情を楽しみ、その良さを残していきましょう。気軽に参加してください。

詳細はＣＯＭ＋にてお知らせします。お問い合わせは三国コミュニティセンターまで

エッセル坂をきれいに　クリーン大作戦

１１月１８日（土）午前８時～
エッセル坂　※雨天時は１１月１９日（日）

枯葉舞う季節、エッセル坂の清掃にご協力ください。

カンタケ栽培講習会

１１月２７日（月）午前１０時～

福井県産のおいしいきのこ「越前カンタケ」のプランター栽培講習会を行います。

つぶやき

暑さが猛威を奮っています。７月に開催された語り部講演会。体験者のお話は心にずんと響きました。メディアであまり触れる事のない実際の状況は想像をはるかに超えていました。あの非日常の状態を、淡々となにか普通の事のように話される語り部の方に胸がぎゅっとしました。今ある日常は災害の一瞬で簡単に崩れてしまいます。なにか他人事にしかとらえられない自分の認識の甘さを痛感しました。反省。まず、できる備えから…防災リュックの準備！
（希）

392 PLUS

みんなのくふうでにぎやかに…

楽しく一緒にまちづくり
みくにの魅力をプラス!!

まち協だより 68 号 発行 23.8.24

編　集 みくに地区まちづくり協議会
事務局 三国コミュニティセンター内
坂井市三国町神明１丁目４－２０☎82-6400
mikuni-k@mx3.fctv.ne.jp

東日本大震災被災者の証言 １３０人が聴講

被災者の体験談を聞き、住民の防災意識を高めようと、三国町のまち協７団体が共同で企画した「東日本大震災の被災者が伝える災害の実態と心構え」が７月23日、三国コミュニティセンターで開かれました。聴講の１３０人を前に妻と長男を亡くした東松島市の菅原節郎さんが生々しく当時の様子を証言しました。
（２面に詳掲）

三國神社周辺を散策

三国の歴史を訪ねるシリーズ「三國神社周辺散策」が６月１１日に行われました。５２人が参加、先進的な教育に取り組んだ歴史を誇る三国南小をスタート。寝釈迦のある恵雲寺のほか、三國神社では宝物殿を見学するとともに神社にまつわる歴史の説明がありました。

■秋のイベント紹介
■防災ミニ教室スタート

北小の児童がアサガオ苗植え

三国北小の１年生が育てたアサガオの苗の植え付けが６月１４日に行われました。児童２７人が５月上旬から育てた苗を手に三国コミュニティセンターに集り、環境部会員の指導で１５個のプランターに丁寧に植えていきました。慣れない手つきながらもみんな上手に植え満足そう。プランターはコミュニティセンター前に並べられ、青や紫の花をきれいに咲かせています。

防災・安心部会

防災ミニ教室スタート

令和5年度の「防災ミニ教室」が6月25日にスタート。

1回目は「日本の災害～災害をイメージしよう」のテーマで45人が参加して開かれました。

3年目を迎える「防災ミニ教室」は、継続することで真の防災力を身に付ける

日本は災害大国

のがねらい。講師は福井工大教授の竹田周平氏で今回は中学生8人も初めて参加しました。

竹田氏は日本が災害大国であることを強調。昭和34年の伊勢湾台風を例にして「風速50メートルを超えると大きな損傷がある」、線状降水帯にもふれ「雨が

年5回

講師は福井工大・竹田教授

降ってから15時間前後にピークがある」と説明しました。

地震については「震度5強以上になると被害が出る」として「南海トラフ地震が発生すると福井でも大きな

備えの大切さ強調

揺れがある」「津波は日本海側も例外ではない」と認識を示しました。

また石川県珠洲市で発生した震度6の地震について被害状況を例に、事前準備など、災害への備えの大切さを強調していました。

防災ミニ教室は来年2月までに計5回開かれます。

中学生8人も参加

防災倉庫の確認

9月10日（日）

三国南小学校（午前9時）

三国北小学校（午前10時30分）

だれでも参加できます。

「防災ミニ教室」スケジュール

・2回目（8月20日）	生き延びる知恵、非常食を備蓄する大切さなどを学ぶ。
・3回目（10月8日）	三国南、北小の両校への避難を体験、経路をチェックする。
・4回目（12月3日）	小学校体育館でテントや簡易トイレなどを設営。
・5回目（2月24日）	これまで学んだ防災・減災への取り組みを基に意見交換。

※10月の日程が変更となる場合があります。

健康福祉・育成部会

高校生がサロンを体験

出村北前茶屋で夏休みの高校生がボランティア体験をしました。8月1日には三国高校2年・石黒虎愛君らが訪れ、茶屋のメンバーから仕事の内容を教えてもらい早速、訪れた人たちに応対。注文をとったりおしゃべりをし、仕事の面白さや気遣う心の大切さを感じていました。夏休み中には出村北前茶屋とまちなかサロンの2ヶ所で合計20人が体験します。

まちなかサロンで読み聞かせ会

おはなしなるの会のメンバーによる読み聞かせ

読み聞かせグループ「おはなしなるの会」（代表・吉田千恵子さん）のメンバーが5月からまちなかサロンを訪れています。「じゅげむ」「肉付きの面」「七どきつね」など民話や童話の絵本を見せながら、分かりやすく読み聞かせています。お年寄りら童心にかえったように楽しそうな表情。読み聞かせは毎月第2水曜日の午後1時半から行われます。

高校生と連携し三国再発見

焼いたピザ食べ、意見を交換

みくに大好き部会

みくに大好き部会では高校生と連携して「みくに大好きプロジェクト」を展開しています。

高校生のアイデアをみんなで考え、よりよいふるさとを創造するのが狙い。これまで1ヶ月に1回、みくに大好き部会員と高校生が集まり三国湊町家再生の勉強や意見を交換してきました。

8月3日には高校生17人がピザ焼きを体験。まち協メンバーと一緒に食事をしながら、まちづくりへの意見を交わしていました。

参加するメンバーを募集していますが、これを土台に中学生、小学生との連携を図っていく計画です。

東日本大震災の被災者が伝える災害の実態と心構え

津波「とにかく逃げろ」

「東日本大震災の被災者が伝える災害の実態と心構え」をテーマにした講演会が7月23日、三国コミュニティセンターで開かれました。130人の住民は生々しい被災の証言を聴き防災への認識を新たにしました。

被災者として津波で妻（当時53歳）と長男（当時27歳）を亡くした宮城県東松島市の元市議、菅原節郎さん（73）は避難所運営について**「大規模災害では公助は遅い。食料が届いたのは地震から3日後で、量もパン4分の1。ひもじい思いがした」**とし現実の避難所の様子を話しました。

河北新報社（仙台市）の須藤宣毅防災・教育室次長は他人を気にせず、てんでばらばらに逃げる教訓「**津波てんでんこ**」を説明。実行するには「家族が互いに逃げているだろう」という確信が重要で、そのためには**「日頃の家族の話し合いが必要」**と強調しました。

生々しい証言　認識新たに

最後のパネル討論ではみくにまち協顧問の福井工大、竹田周平教授が石川県珠洲市で発生した地震の実態を踏まえ**「現実味を帯びてきた南海トラフ地震の備えを」**と呼びかけていました。

被災者の体験談を聞き、住民の防災意識を高めようと、三国町のまち協7団体が共同で企画。河北新報社と福井新聞社が連携した「福井むすび塾ｉｎ三国」として開かれました。

菅原節郎さんは現在、震災で家族を失った子どもたちの心のケアなどを行う活動を行っています。菅原さんの話の要旨は以下の通りです。

妻と長男失った菅原さん

▼津波は真っ黒い分厚い壁が押し寄せるようで、ぼうぜんと眺めることしかできなかった。

▼地震は強い揺れが3分ほど続いた。車で回り避難を呼びかけたが津波が見え、車から脱出した。車はクラクションを鳴らしながら流された。

子どもの叫び声　無力さ感じた

▼「お母さん！」と叫ぶ子どもの声が聞こえたが何もできず無力さを感じた。

▼8日目に家族の遺体を見つけたが、損傷がひどく分からなかった。ネックレスなど家族とわかるものを身につけておくといい。

避難所運営　行政任せにしない

▼公助は遅く行政任せにしないこと。生き残った者同士で避難所運営しなければならない。

▼津波の場合、とにかく逃げることが大切である。

▼これまで津波がなかったといっても「今までになかったに過ぎない」出かけた先で津波に遭うかもしれない。

▼避難所運営には女性がいないとだめだ。女性の力を生かすべき。

▼被災地に足を運び、見て確かめることで防災意識が高まる。

▼生き残った人にも罪悪感がある。当時を思い出し話すのはつらいが、悲劇を繰り返さないため伝えていかなければならない。

参加者の感想

・インターネットで情報を集めるよりも実際に経験された方のお話ははるかに勉強になった。

・辛い経験を話すのは嫌なことと思うが真実を知ることができた。

・避難所に最初に食料が届いたのが3日後でひとり分わずか食パン4分の1。現実を知ることができた。

・経験した人にしかわからない事を聞くことで今、自分がやらなければならないことが見えてきた。

・災害が起きてからではなく、平時から家族で話し合っておかなければならないと痛感した。

・津波の怖さをリアルに聞き、怖いと実感した。家族間の話し合いと心の備えが大事ですね。

・やはり生の声はちがう。身につまされ、説得力がある。今後も定期的に聞きたい。

・震災から10年以上が経ち、意識も薄れがちであるが、気持ちを新たにすることができた。

・行政に頼っていては災害を乗り越えられない。日頃から住民レベルで何ができるか、何をすべきかを考える活動から始めていきたい。

・小さい単位での話し合い、講演会の必要性を感じた。